＜書評論文＞

遂行的言語としてのジェンダーと＜身体＞

Judith Butler, *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of 'Sex'* (Routledge, 1993)

村　田　泰　子

はじめに

フェミニズムとは、ひとことで言ってしまえば、「子宮をもった身体」であることによって長いあいだ限定されてきた女性の生を、なんとか「それ以外のもの」に変えていこうと取り組んできた思考・運動である。だからこそ70年代以降の欧米フェミニズム理論は、〈身体〉ではなく、社会的・言語的・後天的に構築されるものとしての「ジェンダー」を問題とし、その変更可能性を主張してきたのだった[1]。ところが、ここへ来てフェミニズムを悩ますこととなったのが、ほかでもない〈身体〉である。性差にはジェンダーという社会的に構築されたが次元があるとするのはいいが、それなら身体とは何か。もしも身体を「動かすことのできない本質」として隔離してしまうなら、それによって必然的にジェンダーまでもが固定的なものとなってしまうのではないか。

こうして、ジェンダー／身体を区分することの限界が明らかになるにつれて、近年では「〈身体〉など存在しない、それもまた言語によるフィクションになのだ」と強気にいいきる言語決定主義の立場がでてきている。これから紹介するバトラーもまた、基本的には〈身体〉をひとつの意味カテゴリーとみなしている。ただし重要なことには、身体とは「作りもの」であると言ってみたところで、容易に乗り超え可能なカテゴリーではないことを、彼女はじゅうぶんに認識している。だからこそ本書は、'Bodies That Matter'（問題なのは身体だ／身体とは物質性だ）という挑発的なタイトルをかかげ、言説において〈身体〉が作動する場へと立ち返るのである。

---

[1]フェミニズム理論におけるジェンダー概念の発展については、加藤秀一「ジェンダーの困難――ポストモダニズムとジェンダーの概念」（井上俊ほか編『講座　現代社会学　第11巻　ジェンダーの社会学』、岩波書店、1995）などに詳しい。

本稿では、「ジェンダーとは遂行的にはたらく権力である」というバトラーのテーゼを導きの糸としながら、まずはジェンダー関係の基盤として物質化される〈身体〉をとりあげる。つづいて、こうした実体的カテゴリーだけではない、「身体には、意味構築の〈外部〉に棄却されているものもある」ことに目を向ける。この〈外部〉というのが、他でもない「女性の身体」が表象されてきた場所なのだが、この〈外部〉づくりの権力が決して完全なものではないことを、バトラーとともに考察していくことにしたい。

1 ジェンダーの遂行的与件 (the performative condition of gender)[2]

「ジェンダー」という概念はすでにわれわれにも馴染みの深いものとなったが、確認しておけば、それは異性愛的に社会を編成し、保持していくような権力のことである。それはまずもって言語的に構成されており、「男性」「女性」という社会的（精神分析の用語では「想像的」）主体を表象することではたらく。ここでいう「男性／女性」は、あらゆる意味において対称的、かつ互いに惹かれ合うもので、そしてそれ以外のジェンダーはないとされる。

バトラーによれば、こうした主体間の線引きは、われわれ自身がくり返しおこなっている日々の発話において行為・遂行なされる。というのも、あらゆる発話（つまり性差について言われうることのすべて）は、その母胎となるような「記号秩序」としてのジェンダーによってあらかじめ条件づけられてしまっているため、それ以外の場所には、まったく新しい発話などありえないからだ。こうして、われわれは発話することをとおして「想像的主体」の位置へとたえまなく接近しつづけ、それはまた次なる発話のための条件あるいは場として、脈々と継続していくこととなる。

そのもっともあからさまな例としては、結婚式などの儀式があげられる。そこでは、男女の社会紐帯への参加が、親戚・友人一同のまえでの「誓いのことば」として口に出して確認される。あるいは、もっと日常的なところで「名前」のもつ社会的機能を考えてみてもいい。胎児はこの世に生まれ落ちると同時に「命名」されて存在にいたるわけだが、「名」とはまさしく性別のあかしである。まわりの大人たちから「何々ちゃん」「何々くん」と呼びかけられ、そこにはさまざまなジェンダー化の実践がつづく。こうして、いず

---

[2]「ジェンダーの遂行性」概念については、J.Butler, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity* , Routledge, 1990（邦訳は青土社より近刊予定）に詳しい。なお *Bodies That Matter*の第８章のみは、『現代思想』vol.25-6（青土社、1997）にクレア・マリィによって訳出されている。

れか一方の性を誤りなく備えた存在としてのみ個人は社会に出現する。要するに、個人が主体となるということは、ジェンダーをもつことと同時におこるプロセスなのである。

ただしまた、こうしたジェンダー化のプロセスの背後に、何らかの「普遍的なる法」が存在しているわけではない。たしかに「法のようにみえる何か」は存在するのだが、それはバトラーによれば「派生的に引用されてできた効果」であるにすぎない。つまり、ジェンダーとは、遂行的に引用される以前にはなんら実体をもたず、ただそれを「法」としてみとめ、そこに接近していくわれわれの行為の中にのみ「法」として立ち現れるのである。

2 社会的ジェンダーの〈内部〉 ——実体化される身体 ——

この「派生的法」のポジションにもっとも近似させられ、強制的に規範として引用されつづけているもの、それが〈身体的性差〉である。もちろん、それは言語と切り離しては考えられない。解剖学や生理学など可能なかぎりあらゆる次元の言説において「男／女において対称的な差異のかたまり」として書き記された結果の意味構築物、それをもってわれわれは〈身体〉と総称しているにすぎないのだ。——と、ここまではとくに耳新しい主張でもない。重要なのは、この〈身体〉が、構築をおこなうことである。

「〈身体〉が構築をおこなう」とは奇妙にきこえるかもしれないが、それはこういうことである。まず、構築をうけた結果、〈身体〉は「構築以前から自然の中にあった物質的なるもの」として置かれる。——ここでいう「物質」とは、西洋哲学における「物質（matter）／形相（form）」という例の伝統的二元論のそれであるが、質料・素材ともいいかえられる「物質」は、構築においてそれを支配する「形相」という審級のもとに置かれてきた。そうした「物質」は、常に変わらず自然の中に存在しつづけるもので、「構築以前」として表象される。——要するに、〈身体〉は、言語であるがゆえに可変的たらざるをえないジェンダーとは、はっきりと別の場所（つまり自然のなか）にとりわけられるのである。なぜそうする必要があったのかといえば、既にみたように、遂行的ジェンダーはきわめて稀薄なる根拠の上に成る「空っぽの法」でしかない。だからこそジェンダーは、自身の「原因」「根拠」「自然素材」として、身体をとりわけ、物質化／実体化しなくてはならないのである。

こうした権力作用については、バトラーに先立って、フーコーが説得力をもって論じてくれている。まず、彼が監獄の研究において焦点を当てたのは、権力にとって有用であったために眼差されて出現にいたった、「囚人の身体」である。この身体は、監獄において教練されるその身ぶりによって、今度は監獄という制度に対して、存在理由を与えるもの

であった（身体と監獄、どちらの物質化が先でもない）。さらにフーコーは、性の真実を秘めたものとして実体化された「性的身体」と「セクシュアリティの装置」とよばれるものの相互作用についても、重要な研究をのこしている[3]。

3 ジェンダー構築の〈外部〉

そのような〈身体〉とは、いずれも実体的カテゴリーとして語られてこそ、権力にとって意味をもつような種類の〈身体〉であった。すなわち、女性の身体にせよ、囚人の身体にせよ、それらは記号秩序の内部において何らかの実体的カテゴリーとして名指され、語られ、そのことによって不断に権力を自明化してやるものである。それを確認した上で、ここから先は、バトラーとともにいよいよ〈言語の外部〉へと視点を転じることにする。いったい、そこにはどのような身体が隠されているのだろうか。それらは、権力にとってどのような働きかけをなすものであるのか。

3－1 包摂されざる部分——物質化された女性の身体——

バトラーが〈外部〉というとき、それは以下の意味で、厳密にポスト構造主義的に理解されなくてはならない。——デリダによれば、何かの構築がおこなわれる場というものは、単に知覚可能な領域が定められるのみではない。そうではなく、より重要なことには、構築とは「構造に含まれえないもの」「そうでないもの」を同時に決定することでもあるのだ。こうしてできた「構築作用の残余物」こそが、語られえない領域としての〈外部〉を構成するのだが、デリダも言っているように、それは全く沈黙してしまうような「絶対的外部」では決してない。〈外部〉は、記号秩序が定める知覚可能性の領域の「限界」として、「幽霊」として、「不可能性のサイン」として、つねに構築の場を脅かすべく回帰してくる。

「構造にはつねに〈外部〉がある」というこの知見を、われわれの文脈にひきつけて、もう少しわかりやすく論じ返しておこう。まず、ジェンダー構築の「内部」については、既にみてきたとおりである。それは、遂行的に「引用可能な唯一のモデル」としての男性

---

[3]M Foucault, Surveillance et punir, Gallimard, 1975.（『監獄の誕生——監視と処罰』 田村俶訳、新潮社、1977）.

M Foucault, Historié de la sexualité: la volonte de savoir, Gallimard, 1976.（『性の歴史Ⅰ知への意志』、渡辺守章訳、新潮社、1968）

／女性がつくりだされる領域であり、そこでは「男性／女性」あるいは「身体／ジェンダー」といった記号的差異が、くり返し口に出して言われ、確認されつづけることが求められただろう。

対する〈ジェンダーの外部〉は、「口に出されないこと」が絶対的に重要となる。なぜなら、そこには、「内部」におけるジェンダー秩序の限界を暴露してしまうようなものが置かれているからだ。とすれば、問われなければならないのはその具体的な内容だが、それを知るために、バトラーはふたたび例の「物質／形相」の二元的図式をひっぱりだしてくる。

バトラーによれば、「物質」という概念は、西洋哲学においては特殊に女性化（feminize）されて発展してきた歴史をもつ。というのも、とくにプラトンなどのテキストにおいて明示的であるように、西洋哲学が「物質」を語る際には、かならずといっていいほど「母・子宮・助産婦」などといった女性的メタファーが用いられている（「母なる自然」などという言い方を思い出してほしい）。これは、新しい世代やものごとの発展がうみだされる再生産の現場としての物質概念が、妊娠時において胎児に滋養を与えてやる母の身体機能に似せられたものであるのだが、こうした意味の接近がなされなければならなかったのには、ひとつの理由がある。

というのも、そもそも西洋哲学とは、男性のみを「思考する我」「理性の存在」そして「唯一の構築者」として確立することをめざす言説的営みであった。それゆえ、女性の身体がおこなっている「出産」という構築や、あるいは「形相」を成り立たせしめる土台としての「物質」がおこなう構築作用もまた、哲学にとってはうけいれられないものであった。それゆえ両者はたくみに隠喩レベルで近似させられ、そうして「言われてはならないものの領域」つまり〈外部〉へと追いやられたのである。

そして、まさにこの〈外部〉において、ジェンダー秩序は自身の自明性の「限界」を露呈してしまっている。なぜなら、まず一方では、「物質としての女性の身体」はすべてのジェンダー構築が生み出されるために不可欠な、根源の場であると置かれなければならない。それなしでは、いかなるフォルムも立ち現われえない。しかし不可解なことには、同時にそれは、「自身は常に全てを受けいれるばかりで、いかなる境界もフォルムも持ちえないもの」、つまり「存在論的に何者でもありえないもの」とされるのである。――不在でありながら、不可欠なる土台としての「女性の身体のマテリアリティ」。こうした、ジェンダー言説における自己矛盾のことを、バトラーは「不可能なる必然（impossible necessity）」と呼ぶ。そのように、矛盾したかたちでなにものかを排除することによってしか、哲学のごとき全体化するような語りは、成立しえないものなのである。

こうして自身の理論的立場を明らかにした上で、バトラーは本書の後半部分において、〈外部〉が二元的ジェンダーの不可能性をあらわにしてしまう瞬間を、ウィラ・キャザーの小説あるいは映画などにおいて分析している。なかでも白眉は、フロイトからラカンへといたる精神分析理論における「不可能なる必然」についての指摘であるが、その議論のすべてを紹介することはできないので、ここでは、われわれの議論にとってもっとも関係深いとおもわれる、ラカンのテキストをとりあげることにしたい。想像的ジェンダー世界の〈外部〉というものについてはバトラーに先立ち理論化してきたラカンだが、そこでは〈外部〉がいかなるものとして語られているのか、以下にみていくこととしたい。

3−2 ラカン理論における〈現実界〉の再考

はじめに、非常におおまかにではあるが、ラカン理論における〈外部〉を理解しておこう。ラカンによれば、まず男性／女性という区別が想定され、われわれがジェンダー自己を保っているような秩序の領域が、想像界（the Imaginary）である。想像界において自然に成立しているように見える秩序は、実は超越的な高みから吊り支える、象徴界（the Symbolic）の介入をうけているものである。この秩序は、「常に−既に」の完結した外観をみせているが、実は未だ包摂しきれていないものとしての現実界（the Real）を排除しながら成り立っている。これがラカンにおける〈外部〉である。

この〈外部〉領域がラカン理論において意味をもってくるのは、男性主体の確立についての以下の説明の箇所である。——ラカンによれば、自我が確立される以前の男児は、母から切断されることで社会的に十全な主体となるための下ごしらえがなされるという。ここにおいて切り離されるべきものとは、「母の身体」と「ボクの身体」とが自他未分であることの表象である。「自然なる母」「物自体としての母」との連続は、男性に自らの受肉（動物的必然、無力さ）を思い出させるため、男性主体の固有性を脅かす。したがってそれは棄却され、排除されなくてはならない。

こうして棄却されたものは、しかし男性主体の意識からまったく消え失せるのではない。それは、現実界として回帰してくる。そもそも、想像的「主体」などフィクションに過ぎぬことを知らしめるべき領域としての現実界だが、ラカンによれば、それは二重の意味で主体を固定化すべく働いてしまう。まず、否認されるべきもののイメージを見せてやることで、「主体の位置から離れてはいけない」と男性主体に警告してやることによって。また同時に、「失われてしまった母との十全なる身体関係」という魅惑的な表象として立ち現れることによって。こうして結果的に、想像界における男女の性愛関係が成立するとい

う。

このように整理してくると、「世界は〈外部〉との相互作用によってのみ成り立っている」ことについてはバトラーと意見を共にしながらも、そこにはひとつの決定的な違いがあることに気づく。すなわち、ラカンは、三つの界を厳密に区分することをとおして、結果的には「想像界」における男女関係を、不動のものとして理論化してしまっている点である。——もちろんラカンも、「現実界とは象徴界から遡及的に定められたもの」にすぎないとは言っている。しかしながら、（とりわけジジェクなどの理解では）、現実界とは「主体が決して知ることを許されない領域」であり、それを一瞬でも垣間見てしまうことは、自我の崩壊つまり神経症などを意味する出来事である。したがって、〈外部〉は「ずれ」を暴露する場であるよりも、「絶対的に変更不可能な外部」となる。そこには、いかなる変更の可能性もみいだされない。

こうした語りに対して、バトラーはもちろん不賛成である。彼女は、「ラカン理論における三界は、じつは全て想像界ではないか」と大胆にも問いかける。つまり、ラカンが現実界という外部に「母なるもの」を位置づけなければならなかったのも、さらには象徴界という高みに「父なる法」や「ファルス」を置いたのも、それらはすべて、「想像的言語」による思考である。言語とは、現実の社会のコンティンジェントな権力関係の反映にほかならず、ラカン理論もまた、既にそのように編成されていたジェンダーの効果としての「母」「父」の隠喩を、派生的に引用して組み立てられたものにすぎないのである。

本書のサブタイトル‘on the discursive limits of sex’にも明言されているように、身体的性差を言語的に固定化しようとする全ての試みには、必ずや限界がある。それは、「物質的女性の身体」などという「不可能なる必然」をもってしか、内的一貫性を保つことはできない。精神分析の理論もまた、「身体性差＝社会的ジェンダー」という短絡的な運命論をずらすところから出発しつつも、それが男性的な身振りをもって「性差の法」のすべてを語り尽くすかのようなそぶりをみせるとき、やはり限界を見せてしまっただろう。だからこそバトラーは、本書においては「性」についてどのような全体的結論も与えなかったし、ただ他人の書いたものを脱構築し、克服しつづけていくという手法を選んだのである。

おわりに——「語られえない身体」をめぐって——

最後に、遂行的ジェンダーの概念が予示する、変革の可能性について指摘して稿を閉じたい。すでに見てきたように、引用の規範的反復としてのジェンダー権力は、必ずや何らかの〈身体〉を実体化あるいは否認することで成り立っている。そこで否認された身体と

は、ジェンダー秩序の限界を露呈してしまうようなものであった。

それゆえ、こうした「語り得ない身体」の周辺にこそ、引用が正しくないやりかたで遂行されてしまう可能性が潜んでいるように思われる。それはたとえば、この「不在」のはずの身体が何かの拍子にあやまって口に出してされてしまって、秩序／外部の境界が侵犯されることであるかもしれない。あるいはまた、秩序が「不在」から意味を受けとっているからくりが、正しくないやり方でパロディーされてしまうことであるかもしれない。

そうした「失敗する引用」は、バトラーも言うように、至るところで起こっているはずのものではある。しかしまた、われわれはその効果をあらかじめ予測することはできないし、仮に生じた転覆的効果も、一瞬のものである。つまり、それはすぐさま、支配的意味の連関へと再解釈されてしまうのである。こうした「失敗する引用」の生じるメカニズムと効果とについては、バトラーとともにさらなる考察が必要であるだろう。

参考文献

Bistow, Joseph *Sexuality* (Routledge, 1997)

Butler, Judith 'Imitation and Gender Insubordination' in *Lesbian and Gay Studies Reader* (Routledge, 1993)

Hall, Stuart 'Introduction: Who Needs "Identity"?' in *Questions of Cultural Identity* (Sage Publications, 1996).

（むらた　やすこ・修士課程）